

報特攻

平成7年5月

第23号

〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

靖國神社 隊合同慰霊祭

3月31日
靖國神社

当協会の主催する合同慰霊祭は、遺族、来賓、会員総計約五〇〇人の参列を得て、13時より行われた。昨年はこの行事を千鳥淵墓苑を借りて行い、会員からの反響があったが、今年本来の姿に戻り戦没特攻隊員の魂の宿る靖國神社で行った。今後ともこれを継続することになっている。

この日境内の桜はまだ開かず、平日であった為、例年の桜まつりに見る雑踏はなく、英霊の御心を偲ぶにふさわしい環境だった。

祭文奏上や献吟が拜殿で行はれ、その後数椽団に分れて本殿に昇った。神前に額突けば、若い特攻隊員の姿が目に見え、思いを込めて拍手をうつ。

ついで後方の拜殿で吹奏するラッパ、国の鎮一を英霊と共に聞き、五十年前の思いに浸る。

後に続くを信じつつ、往きにし君に何と応えむ

本殿内両側には高松、三笠両宮家からの拝領の献花が飾られていた。



祭文奏上 田中副会長（榊島会長は健康を害し欠席）

献吟

吟 石橋 一歌
笛 佐伯 竜静

第七御橋隊 関口 洋

昭和二十年七月二十五日
種ヶ島沖にて戦死

国の為 散るひとひらは 惜しまねど あだには散らじ 大和魂

石腸隊 片岡 正光

昭和十九年十二月五日

比島スリガオ海峡にて戦死

いざ行かん ただ一筋に大君の勅奉じて 任のまにまに



拜殿に充つ参列者

目次

特攻隊合同慰霊祭	1
戦争謝罪国会決議反対集会	2
回天制空隊特集	3
大東亜戦争忠魂顕彰五十二年祭	12
大東亜戦争開戦記念日の認識	14
特攻基地徳之島に空中補給	16
義烈空挺隊出発を見送る手記	19
大津島回天碑前追悼式	22
平成六年度会計報告	24



ラッパ保存会

総会及び懇親会

靖國神社における行事終了後九段会館に移り、内田副会長の挨拶に続いて最上理事長より次のような会務報告があった。

平成6年度事業報告

平成6年度計画に基づき、以下のとおり事業を行った。

一、慰霊事業

(1) 全国特攻隊戦没者追悼式

平成6年3月28日、千鳥が淵戦没者墓苑において三笠宮殿下をお迎えし、政、財界要人、外国武官他、来賓の列席を得、遺族、会員併せて一〇〇〇名に及ぶ参列者により挙行した。

(2) 世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要

平成6年9月23日世田谷山観音寺において同寺が主催する年次法要に協賛した。当日は、竹下 登元総理、トルコ大使館付武官ハッサン・ギュルゲン陸軍中佐の臨席があり、遺族、会員四〇三名の参列者により挙行された。

(3) 全国各地特攻慰霊へ代表参加

1. 都城特攻隊慰霊祭(4月6日)
2. 万世 々 (4月10日)
3. 知覧 々 (5月3日)
4. 義烈空挺隊慰霊祭(5月22日)沖縄

5. 護国英霊 慰霊祭(7月3日)宝塚
6. 水戸つばさの塔慰霊祭(9月18日)
7. 原町市特攻慰霊祭(10月10日)
8. シベリア・モンゴル 抑留者慰霊祭(10月23日) 福井

二、慰霊碑建立事業

9. 明野特攻隊慰霊祭(10月28日)
10. 伊良湖岬 慰霊祭(11月3日)
11. 回天烈士 追悼式(11月20日)徳山

建立建設地について物色したが、進展せず継続課題となった。

三、その他の事業

- (1) 機関紙「特攻」発行
5月19号、8月20号、11月21号を発行し会員他へ配布した。
- (2) 「特別攻撃隊」頒布状況
頒布 一六六冊
在庫 五七三冊
- (3) その他
 1. 資料として米国で出版された特攻隊関係書籍四冊を取り寄せた。
 2. 遺族、会員その他からの情報に よって名簿等の整備を行った。

そのあと空挺同志会作成の義烈空挺隊に関する録音テープを聞き、ついで戦時中のニュース映画から特攻隊関係を収録したものの映写を見て、往時を思ひ思いを新にした。それが済んで二部屋に分かれ懇親会を行った。

戦争謝罪国会決議を許さない国民の集い

独協大学中村繁教授を会長とするこの集いは、2月3日日比谷公園野外音楽堂に国を憂うる者五千人が参集し(下の写真)大会決議案を採択し、ついでデモ行進に移り国会議事堂に至り「自民党終戦五十周年議員連盟」の代表に決議文を手渡した。

謝罪・不戦決議を阻止する緊急集会

かねてから全国で署名運動を展開し、その数四五六万名に及んだので、終戦五十周年国民委員会では、3月16日憲政記念講堂に緊急集会を開催し、うす高く積み上げた署名簿を「国会請願に賛同する紹介議員」に手渡した。因みにその国会議員は衆参両院合せて二七一名に達し、議員総数の三分の一を上回った。

国会決議に反対する国民の声は、今全国に澎湃として沸き起っている。わが国の将来に禍根を残し、戦没者を言瀆し、国益を損なう国会決議を断固阻止しよう。

亡き特攻隊員の御心を思えば、共に天を頂くことのできない暴挙である。



特攻

回天制空隊

飛行第四戦隊

小月会

この一連の記事は平成6年8月発行の20号と一部重複する内容があるが、小月会からまとめて提供されたので、そのまま掲載する。

体当り特攻による

B 29の邀撃

元飛行第四戦隊長

小林 公二

「回天特攻隊」編成の経緯

米軍は昭和十八年夏頃よりB 29による日本本土爆撃計画を立て、同年十一月印度カルクッタを根拠地とし、中国成都を前進基地とする対日爆撃を行う「マッターホーン計画」を策定し、B 29基地としてカルクッタ西方約七〇マイルのミドナポール地区と成都周辺地区に、夫々五つの飛行場を設定した。成都周辺の飛行場建設は十九年一月末

に約十万人を動員し、五月十日頃に概成した。

十九年五月上旬、米軍の第二十爆撃コマンド司令部と第五十八爆撃ウイングB 29約百五十機がカルクッタ地区に展開した。(成都と八幡の距離は二四〇〇軒)米統合参謀本部は六月八日、少なくともB 29七十機をもって六月十五日(米軍サイパン上陸の日)に対日爆撃を執行することを命令した。十三日カルクッタ地区のB 29は、各機二トンの爆弾を搭載して成都に移動を開始し、成都では燃料補給だけを実施することにした。

十九年八月二十日夕刻、中国成都基地を発進したB 29七十五機(米側発表六十一機)が、倉庫地区に米襲し高々度爆撃を行った。この戦闘に於て、十七時三十分頃折尾上空にて野辺軍曹操縦高木兵長同乗機が体当り攻撃を敢行し、二機を一挙に撃墜した。米軍に於ても、日本戦闘機は意図的に体当りを敢行するものの如しとの情報を流した。

第十飛行師団長吉田喜八郎少将は、隷下部隊の殆んど全力を以って米襲敵機B 29に当らせたが、其戦果はみるべきものが無かった。其の原因を次の様に述べている。日本の現用戦闘機の性能ではB 29の撃墜は困難であり、先ず

高々度性能の向上、即ち二〇〇〇米上空にて自在に戦闘行動可能のこと。

B 29は雲上を飛行し、レーダー爆撃、高々度爆撃等、日本戦闘機の邀撃行動を超えた性能をもっている。即ち吉田師団長は現在持っている戦闘機を最大限に運用すると共に、皇居並びに皇土防衛には、特攻隊を編成し一死必殺の戦法しか途はないものと判断し、特攻制空隊の編成を決意した。それは昭和十九年十一月七日であった。

其後高々度戦隊の編成のため、司偵II型に高射機関砲を装備して鋭意務めたが、空中勤務者未熟で(飛行時間二〇〇時間前後)少なくとも二・〇〇〇時間の操縦者を必要とした。又司偵操縦者は航法戦力は優れているが、空中戦闘や空中射撃の能力は低く、結局早期解散し実用にならなかつた(戦隊長上田秀夫少佐)。そこで特攻体当り以外に方法がないということになった。

B 29体当り特別攻撃隊として、第十飛行師団(東京)編成した部隊名は「震天制空隊」、第十一飛行師団(関西)と第十二飛行師団(小月)の特攻隊名は同名で「回天制空隊」と命名された。これ等の命名は、防衛総司令官東久邇総彦王殿下より賜ったものである。

隊員の選出については、師団長の命令により戦隊長に下令され、飛行隊長が選出した。体当り特攻隊員の選出については、慎重を要するので先ず選出基準を次の如く決定した。操縦者全員に封書を以って次の内容の解答を求めた。

「回天制空隊(特攻隊)の隊員を熱望するか又は希望するか、以上二通りの回答を記入して呈出する」殆んどが熱望であった。これを如何にして八名にしぼるか、先づ親兄弟の家庭状況で長男は、避けた。次男、又は三男を取る。次は技術の程度である、後述するが、体当りと言っても誰れでも可能とは限らない。色々な要因がある、大体以上の方法にて隊長以下八名を選出して師団長に報告した。

回天制空隊の行動と邀撃戦闘

- 隊長 山本三男三郎 少尉
- 幹候九期 20・4・18 戦死
- 隊員 村田 勉 曹長
- 下士操八七期 20・5・7 戦死
- 隊員 金子 良一 軍曹
- 少飛十期 20・5・7 戦死
- 隊員 青木 實 軍曹
- 少飛十期 20・5・7 戦死
- 隊員 高橋 巖 伍長 少飛十二期
- 隊員 藤井 奎治 伍長 少飛十二期

隊員 下田 義宏 伍長 予下操九期
 隊員 須藤 一男 伍長 予下操九期
 山本隊長戦死後は同期生の萱場利正少尉が任命さる。村田、金子、青木の戦死により筒井秀市伍長（少飛十二期）、斎藤幸一伍長（予下操九期）が任命された。従って八名が七名となる。

特攻隊員に対する待遇は平常は他の者と全く変わりなく、唯隊員は団結上又精神的な連繫を保つために同居するよう努めた。外出も自由。訓練は特に高々度に於ける空中操作攻撃法で、二式複戦の特性に就いて細部にわたり教育訓練につとめた。高々度に上昇し比較的軽快に行動する為には機体の軽量化が必要となる。酸素発生装置（従来はポンベは重い）、無線装置及び射撃照準器以外は総べて取外した。武装として二十耗機関砲か三十七耗砲を装備した。

B 29の構造上の弱点は左翼付け根附近にあり、其辺を集中的に狙う。艦船特攻隊と異なる点は、B 29に体当たりしても可能な限り落下傘降下をし、次回攻撃を反復実施する事である。このことは昭和十八年八月二十五日陸軍航空総監部発行の敵大型機に対する接触破壊攻撃方法による（従来は航空事故調査により、接触する相手には致命的の破砕を与えるも自己は落下傘降下により助

かった例を集計し結論を出している）行動の鈍い二式複戦の体当たり戦法は、十分に研究の上でないとなし。飛行第四戦隊でも特攻隊員其他の者で体当りを試みたが、回避されたと残念がっていた者が二、三名いた。実際にはB 29は水平飛行しているように見えるが、上・下・左・右に微動し戦闘機の攻撃を回避しているのである。しかも速度が速いので、一度攻撃占位を外すと再び好位置に占位する事は困難である。たとえば豊後水道上空で攻撃の機を失うと、次の攻撃は西に移動して大刀洗上空で待機攻撃するようになる。豊後水道を北上し北九州爆撃後、福岡から大刀洗上空を過ぎ宮崎から太平洋に出てサイパン基地に帰るのである。即ちB 29の弱点とする左翼付根附近に向って集中射撃すると共に、体当りも此処に向って敢行するのが最良のものと言えよう。参考迄に一例を挙げると、高度八〇〇〇米以上に上昇すると、高度八〇〇〇米以上に上昇するに四十分、四十五分を要し、しかも高度の操縦技術を要する。空気密度の希薄な事は、飛行機の生命である舵の利きが低下し、又人間の記憶力の低下、感度が悪くなる（飛行第四戦隊調査の結果記憶力は65〜75%低下した）。従って高々度を飛行の後には、酸素天幕中に入り二、三十分休む。これはなる

べく早く正常にかえり、次期戦闘に備える為めである。七、八〇〇〇米に於ける飛行性能は、三、四〇〇〇米高度のものとは全々違って来る。直上攻撃の場合三、四〇〇〇米では高度低下は四、五〇〇米であるが、七、八〇〇〇米では一〇〇〇米から一五〇〇米にもなる。従って技術面でも或る程度の操縦技術が必要で、誰でも体当たりが可能とは限らないのである。



(後列) 下田、藤井、村田、須藤
 (前列) 高橋、青木、山本、金子

陸軍准尉 野辺重夫
陸軍軍曹 高木伝蔵

感状

陸軍軍曹 野辺 重夫
陸軍兵長 高木 傳蔵

右者昭和十九年八月二十日在印支米空軍ノ北九州來襲ニ際シ野辺軍曹傳蔵高木兵長同乗シ折尾上空於テ敵B二九型超重爆撃機ニ対シ果敢ナル体当り攻撃ヲ敢行シ其ノ二機ヲ墜落セシメ身機一体壯烈ナル戦死ヲ遂ケタリ兩名方身ヲ以テ皇土ヲ防衛スヘキ烈々タル責任觀念ニ透徹シ居常死生相誓ヒ機直ニ投シテ体当り戦法ヲ敢遂シタル崇高ナル精神ト壯烈ナル行動トハ眞ニ皇國軍人・眞面目ヲ發揮シタルモノニシテ全軍ノ龜鑑タルノミナラス克ク敵ノ心胆ヲ寒カラシメ大イニ軍民ヲ感奮セシメタリ其ノ武功拔群ト認ム
仍テ茲ニ感状ヲ附與シ之ヲ全軍ニ布告ス

昭和十九年九月五日
防衛總司令官 松彦王

野辺・高木兩勇士の戦記

昭和十九年8月20日午後5時、真夏の太陽が西に傾きかけた頃であった。突如空襲警報が発令、我が飛行第4戦隊

は小月飛行場を發進、北九州上空に邀撃態勢を完了した。間もなく西方彼方に米空軍の要塞といわれたB29大型爆撃機80余機が地平線上に現われ、数個梯団となって北九州を目標に來襲して來た。いよいよ我が戦隊も邀撃隊形に移行し、戦鬪の火ぶたを切った。操縦は少年飛行兵第6期野辺重夫軍曹、同乘第13期高木伝蔵兵長の野辺機は敵の第2梯団長機に対し第一撃を指向、37耗砲の第一弾を発射したが撃墜に至らず、このままならば敵機は北九州に爆弾投下は必至と察知し、これまでと決意軍人精神を胸に秘め「野辺唯今から体当り」の一語を残し敵機のやや斜め前方より第2梯団長機を目がけ、まっしぐらに突進、壮烈果敢な体当りを敢行、一瞬、彼我兩機は一塊となって空中に飛散す、更にその爆破片また第2番機に激突、これまた瞬時にして空中分解し、一機をもって敵超重爆撃機二機を葬り、日本の戦史を飾る身機一体壯烈なる戦死を遂げた。兩名は身を以って皇土を自衛すべく烈々たる責任観に透徹し、崇高なる精神と壯烈なる行動をもって皇國軍人の眞面目を遺憾なく發揮し國軍の龜鑑となった。このことは早速上聞に達し野辺、高木兩人は二階級特進の榮譽に輝き、悠久の大義に殉じ、この地永眠されることになつた。

戦友の見た野辺機（坂本秀市）

小月会だよりNo.12
昭和十九年8月20日夕刻北九州上空にて目撃

西方にキラリと夕日を浴びて光る敵の4機編隊を發見、既に敵機は要地上空に侵入し爆撃を始めている。ふと頭上を見ると、真上に敵の4機編隊が爆弾倉を開き投下寸前、見る間に八幡の工場地帯に爆弾の炸裂光が走る。

次なる4機編隊が接近し、機良しと攻撃に入ろうとする瞬間、我が機の頭上後ろから滑るように速く、敵編隊に直進する友軍機が、前上方攻撃か、いや、殆ど敵と同軸で敵編隊に吸い込まれた。その瞬間、空中に巨大な火達磨が生じ、思わず身が震えた。

敵機も友軍機も粉々になり、バラバラになつて墜ちて行く、その時に飛び散つた黒い塊（発動機？）が敵の後続機に衝突し、同機は左翼を失い、大きな錐揉みを描いて墜ちて行った。野辺軍曹機（同乗高木兵長）の、壮烈極まる体当たりを目撃した。一挙に2機撃墜の快挙であつた。

体当り勇士の碑

大膳地区 加藤芳人

細川に沿つて護岸の今昔の面影を眺めながら川上へ10数分、左側にコンクリート造りの明神鳥居がある。

この奥の丘の上に中空に突刺す恰好の一基の碑がある。やや斜めの碑面には「嗚呼忠烈 体當勇士 陸軍准尉 野辺重夫君 陸軍軍曹 高木傳蔵君」と。昭和十九年8月20日、一片の雲もない碧空を茜色に染め始めた5時半頃の事である。北九州地方の空襲に向かう空の要塞、B29に壯烈な体当たり攻撃を敢行した二人の慰靈碑がある。

中国四川省成都發進のB2980機が、対馬海上より高度7千メートルを以て北九州の軍需工業を攻撃目標として侵入せんとした。

一方敵機迫るの情報を接受するや、わが下関小月航空基地の全隊員は命令一下真夏の空に銀翼を輝かせながら、米機一機たりとも北九州には侵入させないぞと急上昇して行った。

敵編隊の一部はすでに八幡に爆弾の雨を降らせていた。その内の4機編隊が折尾上空に差し掛つた時の事である。外側の1機めがけて矢のように突っ込んでいった迎撃機があつた。それは空中でのほんの一瞬の出来事。

体当たりを受けたB29は真っ赤な火を噴いた。その瞬間隣りにいた、機の翼にその火達磨が触れた。火を噴いた体当たり機は紅運の焰を空高く吐きながら、錘搦状態になって落下、もう、機は断末魔の悲鳴にも似た爆音を残しつつ現在永大丸小学校運動場あたりの谷間に激突、爆発炎上した。

八幡上空で特攻として

勇ましく散った男

陸軍少年飛行兵第13期

高木 誠

昭和16年10月。第13期陸軍少年飛行兵として東京陸軍航空学校に入校したが、学校では同じ地方からきた生徒同士は、すぐ仲良しになれたのに私は台湾からの入学の為、友達が出来ず淋しかった。ある日、隣の中隊に同じ姓の「高木」という生徒がいることを聞かされた。理屈はどうでもよかった。同じ姓ということが懐かしく違いに思っていた。熊のような大柄な男が階段をノッシノッシと降りてきて、

「俺を呼んだのは、お前か。」

と、いう。

「俺の名前は高木。お前の名前も高木と聞いたので、どんな男かと思って逢

いにきた。」

ニヤリとした高木が、

「俺は高木伝蔵、鹿兒島県出身、お前は？」

「俺は台湾だ。」

「台湾人か。」

「違う、台湾で生まれて育ったんだ。」

このときが、私と彼との初対面だった。

昭和17年10月、17歳。熊谷陸軍飛行

学校に操縦生徒として入校。式の整列の中に彼の顔が見え、お互い手を挙げて挨拶した。戦争の激化のため、ここでの訓練は厳しく自分のことだけで一杯の毎日だったが、練習機の操縦訓練中に彼の姿が消えた。

後で彼は水戸陸軍航空通信学校に転校、通信と機上射手の訓練を受けていると知った。

昭和19年8月、19歳。北朝鮮の戦闘

機教育隊に転属、訓練も終わりに近付いて実戦部隊に配属される日を持ってある時だった。飛行訓練が終わって格納庫前に整列、各人の操縦について注意を受けていると、二期先輩の二期生が怒鳴った。

「13期、聞け。本日、聞いたところに

よるとお前達と同期の高木兵長が、八幡上空でB29に体当たりして2機撃墜したということである。同じ同期の者

がすでに作戦に従事して戦死しているというのに、お前達は未だに訓練飛行の段階とは情けない。しっかり気合いをいれて頑張れ。」

我が区隊50名は、彼の偉業に頭を垂れて聞いていた。

同期第一号の戦死だったが、この時から私の悲運が始まった。

「同じ高木でも、お前のほうはつまらんのう。」

操縦の失敗の時の言葉だった。

「機銃弾が命中しないのは、お前が恐がって吹流しに接近せんからだ。体当たりした高木を見習え。」

こんな言葉もあった。

こうなると体当たりした高木伝蔵が恨めしくなり、みんなも、

「高木よ、お前も早く体当たりしたほうがいいぞ。」

と、言う。

要務飛行で速くの飛行場に行くとき、同期が寄ってきて、

「なんだ、高木よ。お前生きたったのか、体当たりしたのではなかったか。」

「馬鹿が、俺は見てのとおり単座戦闘機、伝蔵は復座戦闘機。」

「そうかあ、高木が体当たりしたと聞いた時、どうもお前ではないような気がしたな。」

私は早く体当たりせんかったら何を

言われるかと気になった。

我が隊から特別攻撃隊が出撃するというので、旧満州奉天に戦闘機の受領に行った時、警戒警報が鳴り搭乗員整列がかかった。B29の来襲であった。

「敵大型機が来襲してくる。在地にいる戦闘機は全機、機種の種類にかかわらず出撃。敵の高度は4千と低い。たとえ体当たりしても1機たりとも掃すな。よしとかかれ。」

我が隊の隊長が、

「俺達の戦闘機では体当たりしかない。ブチ当てろ。」

と、言った。

高度5千、酸素不足の目に敵大型機がゴマ粒のように見えてきた。

性能が良くて、重装備の新鋭戦闘機がキラリキラリと反転して攻撃を開始した。

しばらくして我々の眼下に9機編隊がやってきた。約百挺の機銃が如露水を逆さのように射ってきた。曳光弾の光が目が開けられないくらいに激しかった。

長機が翼を小さく振って、逆落とすに突っ込んでいった。ようし今日こそブチ当ててやると決心、背面になって突っ込んでいったが、敵の速度が以外と早く、真下にいる筈の敵機は、だいぶん向こうに飛んでいた。敵機の後を

すり抜けるとき、4個のプロペラの後流で我が機はグラグラと振り回された。旧式戦闘機では相手が大物であった。

敵機は飛行場から随分離れた所に爆弾を捨てて、大きく右に旋回しているのが見えた。なにがなんでも今度こそブチ当ててやらんと、隊に還ってまた「伝蔵」と比較されて馬鹿にされると思うと必死だった。前に飛んでいる長機の右に編隊を組んで敵の退路に向かった。さっきより随分手前で背面上って逆落としに突進した。また射つ



てきたが恐さなんてなく、速度が早くなると機首が上がるので、必死になって操縦桿を押さえ続けたが又も失敗した。みんなは簡単に体当たりという

が、こんなにも難しいものとは知らなかった。敵機を二度攻撃して二度とも失敗した自分の操縦技術が恥ずかしいとともに、八幡上空で体当たりした「高木伝蔵」には頭が下がった。自分また、みんなに馬鹿にされる悲哀を考えながら、長機に寄り添って編隊を組んだ。



野辺重夫 准尉



高木博蔵 軍曹

陸軍大尉 山本三男三郎

感状

陸軍少尉 山本三男三郎

右者昭和二十年四月十八日米空軍ノ北九州來襲ニ際シ大刀洗西方上空ニ於テ西南進中ノB29十機ノ編隊ニ突入必死ノ体当リヲ敢行シテ其ノ一機ヲ粉砕壯烈ナル戦死ヲ遂ク少尉ハ夙ニ自ラ志願シテ特攻隊長トナリ烈々タル闘心ヲ以テ隊員ヲ統率身ヲ以テ皇土防衛ノ大任ヲ完遂セントラ期シテアリシカ当日北九州ニ敵機ヲ選フルヤ率先身ヲ挺シテ悠久ノ大義ニ殉シタリ其ノ行動真ニ軍人ノ鬼膽ニシテ其ノ武功亦抜群ト認ム 仍テ茲ニ感状ヲ授與シ之ヲ全軍ニ布告ス

昭和二十年五月十八日
第二総軍司令官 畑 俊六

当時の新聞記事

朝日新聞 B29に体当り撃墜

北九州の空に武勳輝く山本少尉

昭和20年4月18日、福岡県大刀洗上空でB29に単機突入。壮烈な体当りを敢行、雲染む屍と散った屠竜部隊第一回天特攻隊長山本三男三郎少尉の武勳は標として輝き、この程嘗の感状は上聞に達した。同少尉は本年25歳、新潟

県佐渡郡真野村出身、松山高商卒業の後学鷲を志願した。明朗淡白な荒鷲ものであった。教育期間が一度終るやまるで子供の様にはしゃぎ、部下からは良い親父として尊敬を一身に集めていた。特攻隊員達は故山本隊長に続く決意をますます固めている。同部隊を訪へばK部隊長や第二回天隊長のカ少尉故山本少尉と親友の間柄であったナ少尉は、故山本少尉を偲んで左の如く語った。

「全くいい男でしたよ、碁や将棋などは負けると嫌だと言って決してやらなかった程の負けず嫌いな男でしたが、親しい部下思いで有名な男でした。今回武勳が上聞に達し、同少尉も地下で喜んでいることでしょう。基地を飛び立ったさまで、今でも眼前にありありと浮びます。山本三男三郎少尉は回天隊長就任以来、既に死を決意し必死以て皇恩に報いんと、部下の教育に寧日なき取闘を続けていたが、同少尉の日誌を繕き一死報国の念に燃ゆる在りし日の少尉を偲ぼう。

「俺は死んで勝つ」……在りし日の日誌は言う

昭和19年12月12日（第一回天隊編成の2日前）

空染む屍なんと崇高なるそして壮烈

なる然も美しい響を持った言葉だろ
う。北九州の空で皇土防衛の第一線の
責任の為に、B29を身機一体となつて
撃墜した野辺高木機、それは単なる感
傷的なもの即ち衝動ではない。情純に
して烈々たる若人の心なのだ。平常の
大信念を一つの事実として顕現せしめ
たに過ぎないと確信する。俺は云う
「俺は死ぬのだと」我々の世代が吾等
の生命をもつて敵を倒さずして、何者
が此の難局を打開して勝利へ導く戦機
を掴み得るだろう。俺は死ぬ、然し俺
は勝つのだ、勝利の黎明の鐘は高らかに俺達の腕でかつぐのだ。

人生二十五年何の感傷があろうぞ。

更に12月13日の日記。

忠節の心の根幹をなすものは報国の
心である。「義は山嶽よりも重く死は
鴻毛よりも軽しと覚悟せよ、其操を破
りて不覚を取り汚名を受くるなかれ」と
教へられている。此のお訓しこそ忠
節の最高点のものだと考へられる。特
攻隊の散開は此の忠節の御訓を最高度
に發揮したものにしか過ぎない。
「俺はここに小さくねむり帰る日のある
うと家族のものよ嘆くな」

昭和19年12月14日

特攻・第一回天隊編成直後の17日の
日記。

身辺の整理も大体出来た様だ。遺書

・遺爪も準備出来た、安川と母上とに
書く、本日特攻隊一同・師団長閣下・
戦隊長殿を一緒に記念撮影をする。



(前列向って右から二人目が本人)

「遺」天皇陛下の御為に死す。

武人の面目にして男子の本懐と思ひ
ます。聖土の防人として第一回天隊長
としての職たるや重且大なるものがあ
ります。此れを為し得べきは只感謝と
感激あるのみです。

生を享けて二十有余年を幸福に過し
得て大禍なきは諸先輩の御指導の賜と
母上様の慈愛深きお心だと思ひ居りま
す。

母上様に先立つも君に忠なれば亦親

に孝だと言います。

私の戦死を喜ばれたく、老いたる母
を残すは忍びざるも仕方ありません。
兄上様二人によつて充分孝養される事
を信じます。安川様には肉身も及ばぬ
御世話に相成りながら何の御礼も出来
ないで先立つ事をお許し下さい。三年
半の松山での生活が次から次へと頭に
浮んで参ります。人生修養の最も価値
づけられたものが、樺太の兄上様、博
多の兄上様も御頑健にて三郎の分も
御奉公御孝養の程を祈り上げます。
終りに母上様の御健康を切に祈りま
す。

十二月十七日

第一回天隊長陸軍少尉 山本三男三
郎

雲染めし特攻隊長

(山本少尉の記事)

昭和20年4月18日未明、敵機来襲と
の報告を受け、午前7時4分に飛行場
(雁の巣)を飛び立ち、同20分に敵機
を発見した。それは大刀洗上空で西南
に進行中のB-2910機編隊であった。

山本少尉機は、大刀洗上空を襲おうと
した敵の1機に向かって襲撃し、弾丸
全部を撃ち尽したので、小郡上空で、
7時30分、念願どおり敵機と、体当た
り、を決定した。墜落したB-291機

山本少尉の歌碑



は、一面の菜の花畑のただ中にぶすぶ
すと燃えながら残骸をさらけ出してい
た。片方の翼は付近の農家に引っ掛か
り、搭乗員8人の死体が転がっていた。

体当たりした山本少尉は、折れた操
縦桿を握ったまま大破した愛機と共に
小郡村下町附近の広場に不時着した。
早速、部落の人や戦友達によつて自動
車で久留米陸軍病院に運ばれた。昏睡
状態にあった少尉は、突然目をカッと
開き「山本の勝利か」と二度も二度も
叫んだ。そばにいた軍医は、「安心せ
よ敵機はやっつけたぞ」と答えると、
にっこりと笑いを浮かべて目を閉じ
た。時に12時28分であった。

B-29体当り目撃記「西日本新聞」

(吉浦記者)

麦の緑と菜の花の黄色に色どられた
久留米平野を敵は4度襲った。この日

記者は、はからずもここでわが軍の凄絶極まりない体当たり撃墜を目撃した。4月18日午前、エンジンの音を大空一杯に広げ4発のプロペラを光らせてB-29の白い巨体が鈍い銀色に輝いている。「畜生ッ」と思ったとたん聞き馴れた友軍機の爆音が響いて来た。山本少尉機である。「頼むぞ!」と、つぶやきながら無言の声援を送れば、答えるかの如く友軍機はグッと反転して、そのまま猛鷲にも似て空高く真一文字に敵編隊に突っ込む。声も出ない物凄い空のなぐり込みである。握りしめる両手は汗で一杯になり、頭上に響く敵、味方の激しい機銃音に味方機無事なれと祈るのみである。友軍機の1機が敵10機編隊の右方最後尾の1機に、上から逆落しに果敢な突撃を取行する。「あ、あぶない!」と、思わず口をついて出た言葉とともに敵味方は一瞬の間にすれ違う。すれ違ったと見る間にB-29の左翼は吹き飛び、瞬間機体から火を吹き、ゆるい弧線を描きつつ落下、その下方に友軍機が小さな火の玉となって急降下の姿勢、そのままでグングン下降して行く。――ああ、わが軍独特な体当たりなのだ。炎となった敵機は大空に最後の足掻きを見せて、よろめきながら遁走を試みたがついにガッリンに引火したのである

う、空中爆発を起こして残る右翼も飛散し、胴体は二個に裂けて散り、矢の如く緑の大地に吸い込まれ、地獄の劫火の如く黒煙を上げて炎々と燃え続けている。ふり仰ぐ村人達も、じっと合掌し今眼前に見た壮絶な体当たり機の冥福を祈るかのごとく静かに頭を垂れている。目を閉すれば、ありありと眼にあの薄桃色の炎がよみがえる。全身がしびれるような感激である。

第二回天隊



前列右より村田、萱場、青木、後列藤井、下田、高橋、金子

陸軍少尉 村田 勉

感状

陸軍曹長 村田 勉

右者昭和二十年五月七日米空軍ノ北九州米波二隊シ宇佐西南方上空ニ於テ南進中ノB29十一機ノ編隊に突込必殺ノ体当リヲ敢行シテ其ノ二番機ヲ粉碎壯烈ナル戦死ヲ遂ク 曹長ハ夙ニ自ラ志願シテ特攻隊員トナリ身ヲ以テ皇土防衛ノ大任ヲ完遂センコトヲ期シアリシカ当日北九州ニ敵機ヲ邀フルヤ勇躍身ヲ挺シテ悠久ノ大義ニ殉シタリ其ノ行動真ニ軍人ノ鬼鑑ニシテ其ノ武功亦拔群ト認ム
仍テ茲ニ感状ヲ授與シ之ヲ金軍ニ布告ス

昭和二十年六月一日
第二総軍司令官 畑 俊六

村田曹長戦死の状況

昭和二十年五月七日午前8時頃から、

B29約60機が九州各地の飛行場を爆撃した。この日の戦闘で回天制空隊の村田曹長が、中津市三保城山上空でB29に体当たりして散華し、金子・青木両軍曹も豊後水道上空で体当たり戦死した。又今井大尉（松山少尉）も宇佐上空の戦闘で、被爆して、院内の山中で

戦死した。

村田曹長が4日の戦闘から帰還して愛機から降りた直後に、「当たるのは容易じゃないわい、当たる直前になると自ずと操縦桿が動いてしまうのでなあ……。」と言って、大きな目玉に豪快な笑みを浮かべていた。五日に帰還した時は、「今日も駄目だった……。」と呟いていた。だが、7日には申し合わせたように、村田・金子・青木の回天制空隊の3隊員は、生きて再び小月の土を踏むことは無かったのである。

村田曹長機は体当たり後、中津市三保区洞ノ上の山中に墜落し、B29（乗員11名）は大分県下毛郡三光村八面山の腹に墜落した。

20数年前日米両国の協力で函国戦死者の慰霊碑が建立され、翌年この地が八面山平和公園と命名された。毎年日米合同の慰霊祭が行われてきたが、最近では毎年5月3日平和祭として年々盛大に世界平和を願っての行事が繰り広げられている。

その八面山平和公園での平和祭は本年度で二五回目になります。広島原爆の火を持ち帰った八女郡星野村の『平和の火』を新日鉄陸上部西村さん等の手で運び平和公園に灯すようになって八回目になります。今年では平和の火塔が建立されまして、「恒久平和の火」の

塔に点火式が行われました。

日米兩國の合同慰霊祭は此処だけで千人近くの参加者があり、英霊の慰霊を通じて、「世界平和」と、「国際親善」の場として役割を果たしている。

この平和祭に毎回速く盛岡から参加されている戦友森健貞治氏に今年は米國領事から感謝状（記念品共）が贈られ、平和祭の貢献を称えられました。

「村田曹長辞世の歌」

大君の御盾となりて大空に

散る身思わば心嬉しき

村田曹長機 B 29 体当り目撃

中津市三保地区 池上末光

ある日、従兄の家で藤永先生と三保の文化財の話から、村田曹長の体当りの事になった。その話から、村田曹長戦死のようを記録に残したい。旧陸軍航空部隊小月会でその資料を集めているというので、私の見たままを述べ



る。

年配の方は戦争中のラジオ「大本営発表。空襲警報」を思い出す。豊後水道を北上中をまたかという程聞いた。それは国東半島を北上直進し北九州方面、西に進路を変え福岡、大村、長崎に向うコースに八面山があった。米軍 B 29 は成層圏を高々度で飛来したが、貧弱な防空体制が分ると低空で来るようになった。

私はその日、中津工業学校に登校のため家を出たが、大貞の馬揃い山の所で空襲警報が鳴ったので、引き返し尾崎橋を渡り終った時川岸の竹藪に頭上を涼めてヒューバサッと地響がした。

東の宇佐航空隊上空を B 29 の編隊が西に向い私の方に来る。慌てて真辺巖さんの麦田にとびこんだ。宇佐糸口山の対空砲火が白煙を上げ、B 29 の遙か下で空しい弾幕を張っている。編隊は野依か田中空で機首を西に変え城山上空にさしかかった時、南東方向の浮雲の中でダダッと機関砲の音がした。オヤッと思い注視した。

当時の米軍編隊は 4 機、日本は 3 機三角編隊で見馴れた者には奇異に感じた。爆音のする浮雲の下を B 29 の先頭が通過すると、同時に村田機が雲の中から太陽を背に太陽の光の流れる中を真っ直ぐに急降下した。8 機編隊だっ

たと思う。その右翼後尾機の水平尾翼

前方から大きな B 29 の胴体の下にはいと、同時に一気に上昇反転し直角に近い角度で、然も前方から通せんぼをする恰好で突き上げた一瞬、閃光と共に B 29 は尾翼と主翼が真二つに割れ、ふわりと浮き上った。スローモーションをみるようだった。そして主翼が分解した。空には落下傘が一つ二つと漂っていた。村田機は、B 29 の進路と反対方向、即ち西から南東に右翼の先端が折れた状態で、プロペラは止ってはいたが折れてはいなかったので、思わずエンジン始動！ 操縦桿上げる！ と叫んだ。その念いも空しく大谷の南東斜面に激突した。じっとみていた私の判断では、村田機体当りは物理的に城山上空か伊藤田上空であろう。村田機は B 29 の進路を予め B 29 を待伏せしたのであろう。計算された攻撃に興奮した私は尊敬の念を抱きながら、猛烈な勢いで我が家に帰り、村田機墜落現場に向った。

その時、中島六郎さんが先祖代々の小刀を腰に差し後からやって来た。又、藤原実さんが木銃を担いで来たことを思い出す。少年の私が先頭で走った。上空に双発の友軍機が旋回していた。大人達は敵機ではないかと見上げていた。私は「月光」ではないかと

知ったか振りをした。中学生仲間軍機に委しい者がいてよく教えてくれたので威張ってみたかった。小月会だよりによれば「屠龍」のようである。月光ではなかった。現場に到着した時は誰一人きていなかった。まだ火の手も大した事もなく敵の中で白い煙が上り主翼の散乱した近くで油が燃えているた。

「おおい！ 誰かいなか」
声をかけたが笹竹の響く音だけが返った。主翼に近い笹竹をかき分けた時、村田曹長の頭部を発見したので集ってきた大人をよんだ。五分刈で若白髪があった気がする。

村田曹長散華三十六年の昔
洞ノ上 千鳥長造（78歳）

今年も葉桜の季節となり、村田曹長が壮烈な戦死をとげられた5月7日が過ぎた。

思えば36年の昔、当時の記憶がまざまざと脳裏に浮かぶ。当日は五月晴れの好天気。私が野良仕事の仕度をしている時、突然空襲警報のサイレンが鳴り出した。外に飛び出して空を見上げると、東の空に爆音、一機ではない、数機のように、B 29 の編隊に糸口山兵器廠から高射砲を撃つが、仲々命中しない。城山の上空あたりから、B 29 の

編隊は進路を八面山の方向に転じた。示威飛行か、写真撮影をしているのか分からない。軒下から見えなくなったので、安平（やすら）の土手まで走って行った。はるか西方上空の雲間から機関銃音がする。友軍機2機がB29に発砲しているが、まるで手応えがない。そのうち1機が全速で最後尾のB29に体当たりした。当てられたB29は、先ず片側の発動機が落ち、ほどなくもう一方のも落ちた。B29の巨体は、まっさかさまに八面山北側に落下、山陰のため途中で見えなくなった。

村田曹長機は、体当たりした余勢で火を噴きながら飛んでいたが、火だるまとなり、キリモミ状態で洞ノ上中尾谷の山中（伊藤田力氏所有）に墜落した。B29が墜落した後、機関銃音がするのでよく見ると、日本戦闘機の残機が落下傘で降下しているB29の乗員を銃撃していた。火だるまになって落ちた日本機が気にかかり、煙の昇る中尾谷に走った。途中、日本文字で○製作所と記された部品を拾ったが、何だか分からなかった。バリバリと焼け広がる草むらに酸素缶が2個落ちていた。当時、上空高く成層圏を飛ぶ飛行機は、空気が薄いので必ず積載していると聞いていたが、もしや爆弾では

あるまいかと、ヒヤヒヤして通り過ぎた。火勢の強い現場にたどりついたが、余りに火が強くて墜落機には近づけない。よく見ると、操縦桿を握っている手首に腕時計が見える。車輪のタイヤも、黒煙をあげて燃えている。村田曹長の遺体は四散して、残って見えるのは、両腕と頭だけ。思わず念仏台草。

暫くして村人が山火事を消しながら登ってきた。皆一所になって四散した遺体を集めた。その時、藤元繁雄さん即ち肉片が松の枝に巻きついていてそれをとるのに苦労した思い出を語る。

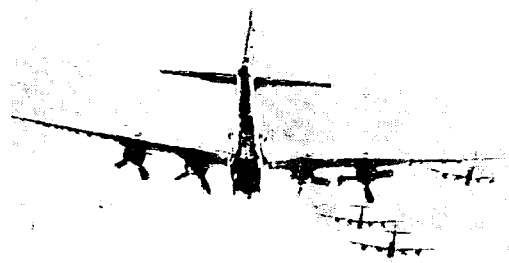
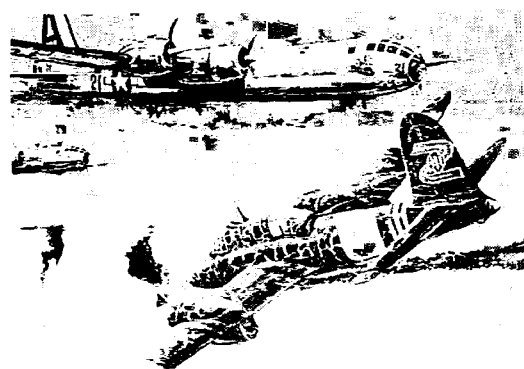
村田曹長の遺体は洞ノ上の人々によって、池上区長さん宅に運ばれた。当時うどん箱に白紙を敷き、さらし木綿に肉片を納めた。うどん箱が2個だったと思う。池上区長さんは在郷軍人と協議の上長久寺まで運び、長久寺で読経、通夜をした。そして村田曹長の遺族を迎えにくるまで安置していた。

一方山火事は三保村警防団員の出勤で、夕方までに大体消火した時、国防夫人会員が昼食とも夕食ともつかぬ握り飯を運んでくれたのを食べた事を思い出す。皆帰ったあとのわずかな残り火からまた燃え出した。警防団員は夕食後風呂に入らず、また消火にかけたとか。

その後三保婦人会により、植山三省さん書を三光村土田の石工・中山長夫さんが、自然石に『昭和20年5月7日、単機米軍機体当諸共墜落壮烈戦死』側面に石材提供伊藤田力。と陰刻してある。この自然石は約2m×1.5m×0.8m位の安山岩。この壮烈な戦死記念碑を設けた年月日がどこにもないのが残念である。

三保の郷土史家・佐藤正義氏の「郷土ひとりある記」の村田曹長の稿に、今はなき植山三省さんの句を結びにしてある。

殉国の碑はとこしえに風薫る
村田曹長墜落地点はこの記念碑南東下40歩の所にあるが、初めての人にはわかりにくい。三保の文化財を守る会で標柱を立てたらどうであろうか。



少飛会 海法秀一画

大東亜戦争忠魂顕彰五十二年祭

平成六年十二月八日

於靖国神社

しょう。

思えば伏して

亡びるより征で

て国難を開かむ

と、昭和十六年

十二月八日、真

満腔の賛意を表するところである。

もう一つこの祭典の特色とすること

は、祭文を奏上する人がいつも若い学

生である。今回は早稲田大学政経学部

四年生の田中裕一氏が次の祭文を捧げ

た。

祭文

本日、ここ靖国の御社におきまし
て、大東亜戦争忠魂顕彰五十二年祭を
執り行ひますにあたり謹んで御霊の大
前に祭文を奏上申し上げます。

今を去る五十三年前のこの日、わが
国は国家の存亡を賭けて、米英両国に
宣戦を布告致しました。顧みれば、明
治維新以来わが国は、四方みな欧米列

強の植民地といふ厳しい対外情況の中

でよく独立を保ち、近代化を推し進め

て参りました。しかし欧米列強は、こ

のを有色人種の独立国の発展を喜ばず、

これを屈服させて自らのアジア支配を

完成させるべく、つひにA B C D包囲

網を布き、経済的な圧迫包囲をわが国

に加へるやうになってきました。その

中にあるまでも、わが国はあくまで平和

を強く願はれた先帝陛下の大御心を体

し、対米交渉をぎりぎりまで譲歩して

続行致しました。しかし、対米交渉も

ハル・ノートといふ最後通牒を突きつ

けられ、わが国は国家存亡の関頭にま

大東亜戦争忠魂顕彰会（代表者国土
館大学教授金城和彦）では毎年開戦記
念日の十二月八日に靖国の英霊の御前
でこの御祭を実施している。その趣意
書の一端には次のように述べている。

「しかるに戦後の我国は、外国人
でさえ斯く評価しているに拘らず、
あれから五十三年を経た今も、強制
された歴史の断絶や、偏見と虚偽に
満ちた報復の極東軍事裁判による戦
争犯罪意識に毒され、この歴史的事

実は、いまだに我々の立場に立つ民
族の魂とはならず、その名をアメリ
カの言う太平洋戦争と呼び、しかも
我が同胞が身を挺して遂行したこの

戦を、自ら侵略戦争と断じて恥じめ
有様で、それは忠魂に唾をする許し
難い風潮であります。敢て侵略を言
うならば、欧米列強が植民地を搾取

していたことや、今次大戦末期ソ連
が中立条約を踏みにじり満州に侵入
したことや、またロシアが未だに我
が北方領土を不法占拠していること
こそ、侵略行為でなくて何でありま

珠灣劈頭に亜細亜の解放を期して、
火の玉となり風神となり、断々乎と
して白人の壁に体当りを敢行したの
であります。

以来、我が忠勇なる将兵は、祖国
の楯となって、支那大陸にはたまた
南の陸海空に、そして国土沖繩に、

精神力のあらん限りを尽して戦い、

後に続くを信じて散華したのであり

ます。

ここに於て我々は、昔に溢れる泣

きことや、雄叫を忘れて負け犬根性

を打ち砕き、ただ一途に崇高なる忠

魂の名譽と御国の誇りを念ずるの余

り、戦に敗れた八月十五日をとらず

敢て開戦の日たる十二月八日を期し

て、神々のいます靖国神社の本殿の

大前にて、伏して忠魂の遺志と殉国

の精神を偲ぶと共に、自らに誓う

「大東亜戦争忠魂顕彰祭」を齎行い

たす次第であります。（以下略）

昭和42年から十二月八日のこの祭典

を主催しておられる金城和彦氏の主義

主張はこの一文で明白であり、我々は

で追ひ詰められるに至ったのでありま
す。当時、永野軍令部長は九月六日の
御前会議において、次のやうに述べら
れたと聞きます。「戦はざれば亡国、
戦ふもまた亡国であるかも知れぬ。戦
はざる亡国は魂まで失った真の亡国で
あり、最後の一兵まで戦ふことによっ
てのみ死中活路を見出し得るであら
う。戦つてよし勝たずとも、護国に徹

した日本精神さへ遺れば我等の子々
孫々は再起するであらう。」と。ここ

に至って、わが国はつひに開戦に踏み

切ったのです。このお言葉を思ふ度

に、大東亜戦争の目的は日本民族の魂

を子々孫々に遺すことにあつたと強く

感じます。

我が先人の方々はアジアの解放を期

して決然起たれました。緒戦におい

て、我が軍は陸海ともに進撃に次ぐ進

撃を続け、開戦後僅か半年にして東南

アジアのほとんどの欧米植民地を数百

年にわたる支配から解放されたのであ

ります。このことは実に、世界史上に

おいて、大航海時代以来続いた白人優

位の潮流を覆す一大転換点となりまし

た。しかし、昭和十七年六月のミッド

ウェー海戦、同年八月から始まったガ

ダルカナル島の戦ひを境にして戦局は

一転し、その後は敵の圧倒的物量の前

した。昭和十八年になると、山本五十
六連合艦隊司令長官が南方で壮烈な最
期を遂げられ、敵は太平洋の制海・制
空権を手中に収めていよいよ我が絶対
国防圏に肉迫してきたのであります。

戦局が急を告げるに従ひ、有史以来か
つてなかった学徒出陣が敢行され、老
いも若きも一つとなって、或る者は本
土沖繩を守るため、特別攻撃隊員とし
て必死の出撃を行ひ、或る者は大陸に
てソ連の悪虐行為より在滿邦人を救は
んと一身をなげうち、そして又或る者
は日本を速く離れた南海の孤島にて勇
敢にも戦ひを続けられました。

特に本上で唯一戦場となりました沖
繩におきましては、中学校の学徒の
方々も鉄血勤皇隊をはじめとする挺身
隊を編成されて陸軍二等兵として出陣
なされ、また、女学生の方々も特殊看
護婦としてひめゆり部隊などを編成さ
れて戦野に赴かれ、若い命が祖国の急
に殉じられたのであります。

無念にもわが国は戦ひに敗れは致し
ましたが、英霊の方々の勇敢奮闘は敵
の心胆を寒からしめ、敵をしてわが国
の完全制圧を断念せしめました。のみ
ならず、アジアの人々に戦ふ勇氣と自
信を与へ、戦後アジア諸国は次々と西
欧列強から独立を勝ち取りました。か
うした英霊の方々の尊い勲の上に現在

の日本およびアジアの繁栄があること
を思ふとき、我々は感謝の念ととも
に、後に続く自分たちが重大なる使命
を授かつて生きてゐることを感じず
はおれません。

翻つて今日の国際環境を見るに、東
西冷戦時代の終結より数年を経て、わ
が国は精神的自立がますます不可欠な
時期に立ち至つてをります。かつて多
くの英霊の方々が戦はれた東亜の諸国
は、往年の後進国の姿を一変して急激
な経済成長をとげつつあります。欧米
諸国は、このアジアの勃興を警戒し、
ヨーロッパはEU、アメリカはNAFTA
を形成する一方、東亜には団結を
許さず、自由貿易の名のもとに強く市
場開放を迫り東亜の発展を抑えようと
してをります。それに対抗して、アジ
アの諸国は団結して欧米に対する発言
力を確保しようとして、わが国にリーダ
シップを求めめる動きが起るに至りま
した。

しかるに、日本の政府は未だ過去を
断罪し謝罪を繰り返すのみで、主体的
に国際秩序形成へ参画しようといふ勇
氣は全く見られません。去る九月、村
山総理は東南アジア諸国を歴訪し行く
先々で謝罪外交を展開致しましたが、
多くの国々はかへつて過去の謝罪より
も未来の展望を語ることを要請し、マ

レーシアのマハティール首相に至つて
は、二五十年も前に起きたことを謝り
続けるのは理解できない。」と指摘さ
れました。マハティール首相はさら
に、マレーシアのアジアに関する構想
を呈示し日本に協力を求めましたが、
村山総理はただ黙すのみで、何も応へ
ることが出来ませんでした。
現今の日本政府は、わが国の置かれ
てゐる立場を自覚せず、かへつて終戦
五十年を期して国会における謝罪決議
を画策するなど自らに犯罪国家の烙印
を押さんとしてをります。このような
決議がなされれば、英霊の勲が子孫に
伝はる機会は永久に絶たれ、国家国民
の生命力は時と共に頹廢してゆくより
他にありません。さうなれば我が国は
次の時代を切り拓いて諸外国の期待に
応へることも出来ず、やがては内より
朽ち果ててゆくことになるでせう。今
私どもに必要なのは、歴史を継承し、
先輩方に恥じぬ自分であらうと決意す
ることでありませう。

終戦五十周年の節目の年を来年にひ
かへ、私どもは、国会謝罪決議をはじ
めとする歴史断罪の風潮を断固退け、
英霊の方々の勲を顕彰してこの美しい
大八島國を守り固め、四海の国々と協
力して、真に世界の安定・協和に貢献
できる日本の國を建設して参りますこ

とをお誓ひ申し上げます。

護國の英霊よ、願はくば、天翔りつ
つ、国翔りつ、我等を新たな國づく
りへの道へ導き給はんことを参加者一
同心より祈念致しまして、私の祭文と
させて頂きます。

平成六年十二月八日

早稲田大学政治経済学部

四年 山中裕一

祭文奏上について独唱「海ゆか
ば」、奉納吟「英霊を弔う」、合唱「荒
城の月」「故郷」と英霊をお慰めする
行事がとり行はれたが、それらは全部
戦後に育つた人々の手で進められて
いった。

敢えてこれらのことをここに紹介す
る所以のものは、このような行事が次
代の人に受け継がなければならない
ということを強調したいからである。
我が特攻協会も、生き残つた老兵が申
訳ないという気持ちだけで祭事を催し
ていたのでは、後に続く者を信じて
散つた英霊の御心に添うものは何もな
い。協会も体質の若がりをはかるこ
とが緊要事である。

大東亞戦争開戦記念日の認識

十二月八日を開戦記念日とし、何故に開戦に踏み切らねばならなかつたかを再確認することを提唱する。東京裁判史観が国民精神を蝕みつつあるとき、開戦を決意するに至った当事者の苦衷、そこには侵略戦争を始めるという考えなど微塵もなかつたことを、国民は確かと認識しなければならぬ。戦争中はこの日を大詔奉戴日として開戦の詔書を奉誦したものだ。あの詔書には当時の我が国の立場と開戦のやむなきに至つた真実が鮮明に述べられている。

……米英兩國ハ残存政權(重慶政府のこと)ヲ支援シテ東亞ノ禍ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ与國ヲ誘ヒ帝國ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメントシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交譲ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシ

メテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス
斯ノ如クニシテ

推移セムカ東亞安定ニ関スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ帰シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ為驟然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ(以下略)

事實は全くこの通りであり、この文面には少しの誇張もない。
あの頃、就中16年7月米英蘭の対日資産凍結(經濟斷交)から、11月26日ハルノートを突きつけられ遂に開戦に踏み切るまでの、我が政府と軍部首脳

そこには今の政治家のような党利党略、私利私欲は秋毫も感じられない。更にまた最大に高揚した陸海軍將兵の存念も、この際回顧してみる必要がある。大戦末期に現れた特攻という戦法に参加した人達の、あのような高度な没我の精神が、この頃から既にみられたということも、この際再確認すべきである。開戦翌頭の真珠湾攻撃は、連合艦隊司令長官山本五十六大將の強固な意志によって実現したのである

が、当時第一航空艦隊参謀だった源田実氏の書かれた「奇蹟の成功・真珠湾攻撃」と題する一文の中に次のように述べている。

「ちょうどその頃、たしか艦隊が訓練を終つて有明湾に入った昭和十六年の一月下旬だったと思う。私は第十一航空艦隊参謀長・大西滝治郎少將の書状を受けとつた。それには簡単に「重大な要件あるにつき、単身にて鹿屋基地に來りたい」旨が記されていた。

同じ航空畑の出身として、私は大西少將の薫陶を非常に受け、また尊敬もしていたから、呼び出しを命ぜられても特に奇異とするには当らなかつた。鹿屋まで二時間である。

参謀長室では少將ひとりがむつかしい顔をして、私を待っていた。すずめに従つてゆつくりとソファに腰を落着けるよりさきに、
「まあ読んでみたまえ」
と少將は口を切つた。

美濃紙の罫紙、すこく達筆の文字が、すぐに眼を射た。見覚えのある連合艦隊司令長官・山本五十六大將のあざやかな墨痕だ。

枚数にして三枚、特に肩をいからしたような文章でなく、淡々と用件のみが綴られていたが、読みすすむにつれてその内容は私をまったく慌てさせ

た。背に冷たいものが走るのを感じさせた。兩頬のあたりが寒かつたのは、おそらく顔色が変わっていたためではないかと思う。

今日その手紙は行方不明である。大西中將も亡く、私も正確にその文章を記憶していないが、文意のみはなおおざやかである。

「——日米開戦の場合は、ハワイ方面の米國艦隊を撃滅しなくては、絶対に勝てる見込みはない。そうしても最終的勝利の確侵はないが、この作戦だけは絶対不可欠のものである。この攻撃には、第一、第二航空艦隊をあてる。それ故にこれが可能かどうか研究してみてくれ」

美濃罫紙には、のっけから、こうした意味の重大な根本内容が記されていた。

さらに、「攻撃は片道攻撃とし、目標は戦艦とする。また、攻撃部隊の責任者には、連合艦隊長官の職を辞して、不肖山本が直接これに當る」という驚嘆すべき内容がこれに続いていた。

私は思わず身を震わせた。単なる戦術的なかかけ引きとして、真珠湾攻撃が考えられたことがあるかも知れぬが、全海軍將兵にとつてこれらの現実化など毛頭考えられぬことであつた。それ

特攻基地徳之島に 空中補給に出撃す

挺進飛行第二戦

島山 卓次

昭和二十年四月上旬、我々挺進飛行戦隊所属の輸送機五機は一七時〇〇分、板付飛行場を次ぎつきに離陸し、薄く煙をはく雲仙岳を右下に見て、沖縄列島の弦に当たる航路を一直線に、南西に飛行していた。航程約二時間、一九時日没の薄暮の間にせめて、巾三〇メートル、長さ六〇〇メートルあると言う徳之島飛行場の、確認だけでもしておきたかった。

敵の艦船一四〇〇隻以上、航空機一五〇〇機の米軍は、三月一八日以来沖縄本島周辺を包囲し、先ず艦砲射撃を以て攻撃して来た。

徳之島の南西海岸に在ると言われる、我が軍の特攻基地も、連日の砲撃で通信施設が破壊され、その消息も途絶えてしまった。

三月末からは、敵も沖縄本島上陸作戦に備えてか、艦砲射撃の度は益々激しく、飛行場も日中の使用は不可能となったが、飛行場端の洞窟内には、尚二〇機の特攻機が残っているらしい。

そこで、部隊に通信機搬入の命令が下った。

飛行場といっても勿論、特攻用に急設された小さなもので、命令した隊長以下我々も、見たこともなければ、そこに在ると言うことさえ知らなかった。

「多分、島の南西海岸にあるらしいが、日中は敵の砲撃で穴だらけだが、夜になると穴埋めをしてあるので、長さが六〇〇メートルあれば輸送機の発着位は、どうにか可能である。

但し、島の周囲は敵艦に取り囲まれているので、夜間照明は出来ないが、飛行場の四隅には穴を掘り、赤色灯を真上に向けて点灯してある。島を余りはなれると敵艦よりの射撃を受けるので、場周飛行は小回りにして速かに着陸し、着陸後はエンジンを停止せず、直ちに積載物を降ろし、成るべく早く島から離れること、但し長機は離陸後上空にて、全機の離陸を確認してから帰還すること。板付飛行場の離陸は一七時とし、三分間隔とする」等々の細かい注意が、戦隊長からあった。

編隊長塩田中尉機（長機操縦島山少尉に機関係一名）以下、緒方少尉、後藤少尉、松井少尉、内藤少尉、塩崎少尉の特操の面々に、大出准尉外のベテランが副操縦に付いた四機は、敵の迎撃を避けて機の間隔をおき、一七時〇

分板付飛行場を離陸、沖縄に向った。途中左手に見えた九州の島影を離れる頃より、次第に高度を下げ、敵艦艇より電探を避ける為、島に近づく頃は海上一〇m位にて飛行する。

予定時間の一九〇〇頃、高度五〇〇〜一〇〇〇mに雲量八位の層積雲があり、行く手遙かの雲下に浮かぶ鼠色の島影が見えきた。

薄暮とは言え、島の前方は海上遙か彼方まで案外に明るく、処々に小さな積乱雲が夕陽に輝いていた。もう少し前進すれば、右手に沖永良部島までも見えるかも知れない。

間違いない徳之島！と思った途端で「オオッ、グラマン！」の塩田中尉の声に指差す右前方を見ると、二機のグラマン戦闘機が目前に迫って来た。

武装とて無い輸送機では回避するより致し方なし、慌てて左に旋回すると共に、急上昇して、幸に近くにあった雲の中に飛び込んだ。

この頃には、敵の艦影なしと高度も三〇〇m位に上げて飛行していたのと、近くに断雲があったので助かった。

雲中に飛び込むと同時に、水平飛行で約一分ぐらいか、その間程永く感じたことは無かった。今にも雲中の我が

機目掛けて、敵弾が掠め飛ぶのではないかと思ひ乍らの雲中飛行は余計に永く感じる。

それから更に左に四十五度変針し、僅かに上昇を続けること一分。更に右に四十五度変針する。機関係りが何時のまにか用意してあった錫箔を、変針する度に窓からばらまいていた。敵機は機上探知機を備えていると、考えることである。

ほんの三〜四分ではあったが、操縦桿にしがみついている身には余りにも永かった気がする。待ち切れずに雲下に出て、島の方向を見た時だった。

「いかん！未だ駄目だ！」先程のグラマンが二番機を追っているのが見えた。

慌てて再び雲の中へ。もう辺りは薄暗くなってきた。

今度は雲中を島とは反対方向に、二〜三分飛行して再び雲下に出て見た。

先程のグラマンも後続機も、何処へ行ったか見当たらないが、そろそろ島の方向に近付いて行った、雲下の故か海面はすっかり暗くなりかけていた。

その時だった！、今迄我々を追っていたグラマン二機が、反転して暗い海上に鋭い銀色の翼を見せて遠ざかって行くのが見えた。

左手に黒く見える島影に近付き乍ら、グラマンの飛び行く方向に眼をやると、手前の下層に浮かぶ、断雲の向こうは、漠然とした水平線の彼方まで、残照と言いか意外に明るかった。

中層雲の切れ間から洩れ差す、黄金色の光は海面まで届いて薄いベールとなり。更に透かし見る遠方は、上層雲のみか？、夕焼けの空は海面の藍色に反射して、空全体が緑を交えた黄金色に輝いていた。

その中に、海面から盛り上がった大峰をつかの隻乱雲は、速く近く幾つかの峰を作り、既に崩れだした雲の峰は、横にたなびいて灰色の層をなしているもの。盛り上がる峰の部分に、未だ白銀色の鋭い光を放つものもあり。南の海に生成する積乱雲の、標本を見る様であった。総て瞬間に見た感じであり、下手な描写をすれば永くなくなるが。

そんな背景をバックにして、既に暗く見える島の上に掛かった積雲の、向こうの中層雲の下を、今しも沖繩本島周辺の敵艦船に向かって飛び征く、七、八機の影絵の様な友軍の特攻機が見えた。

今迄吾々を追っていたグラマンは、母艦からの指令か？、此方を諦めてか？、反転してこの特攻機を追い掛け

だしたのだった。

あの轟音と興奮の坩堝と化した特攻基地知覧から、必勝の鉢巻き姿で、「一足お先に」にと戦友に別れを告げて機上の人となり、一路沖繩の敵艦目指して飛び征く特攻機ではあったが、九八式直協偵と見たその姿は、脚を出し、一見して猫背に見えた。誠に申し訳無い話だが、アヒルの行列の様に哀れにも見えた。

哀れなこの機影を追っていく、憎きグラマン奴。護衛の戦闘機も無く、性能の違うグラマンに追われては、……：……：……：どうか追付かれねば良いかと。そのグラマンに今迄、追い廻されていた我が目を忘れ、只々、無事に任務達成してくれと、祈るのみだった。その様な特攻機の影も、海上の景色も、グラマンの機影も、日没と共に瞬時にして、拭い去られる様に消えて行った。

そろそろ敵は、夜間戦闘機P-38との交替時間では？と、考えると一刻も速く島に到達しなければならぬ。頃は良し、と島の南西端の飛行場と思われる上空に、高度一〇〇mで進入した。

既に暗闇となった中では、陸地も海面も何も見え無い。赤色燈が四ヶ所、飛行場の位置を示しているのみだった

が、北々西に伸びた長方形で、着陸方向を確認した。

上空で旋回し、赤色燈に沿って滑走路と思われる方角に飛行すること一分、よし三二〇度と確認後、左に九〇度で三〇秒、更に九〇度変針して一三〇度で二分飛行し、第三旋回は一二〇度廻り込むと共に脚下げを、この時点での高度は五〇m位だったか。

これらの操作も総て真暗闇の中でのこと、計器盤のみ青白く光り、窓を開けて海面に眼をこらすと、波頭が僅かな光を帯びていた。

飛行場に対して、左斜めに進入して来た筈だからと、機首を下げ乍らの左六〇度の第四旋回、羅針盤は三二〇度を示した。よし！これで確かに滑走路に向かって居る筈だ。

フラップ二〇度下げ、エンジンを絞り、高度を海面すれすれ位迄下げた。

見えるぞ赤色燈が！、方向良し！、フラップ全開、前照燈点灯の瞬間、波打際の白い微かな光を通り過ぎた。左の赤色燈が、またちらっと見えた。飛行場に入ったを確認すると同時に、エンジン全開、地上五〇cm位の機首を思いきり上げ、落下着陸の姿勢で接地した。同時に尾部が上がる位にブレーキをかける。光の見えない短い滑

走路である、突破したら大変なことになるからである。

少々の余裕を残して滑走路の端近く停止して、やれやれと一息ついた。闇の中に、懐中電灯を持った兵隊が走り出てきて、誘導路に入った。

後続機も次ぎに着陸してきて全機無事を確認、その間にエンジンを掛けたまま積載物を降ろし、再び闇の中を離陸した。

上空で旋回し全機の離陸を確認後、一刻も早く島を離れ帰還の途に着いた。

高度二五〇〇m、月は見えないが、明るい積雲層の上を飛行すること一時間半、警戒警報発令中の、唐瀬原飛行場に帰還した。

砺田隊長は、飛行場のピストに出て待つて居られ。全機の無事帰還とその労をねぎらって、航空ブドウ酒で乾杯して頂いた。

二日後今度は、特攻機に使用する爆弾搬入の、緊急命令が出された。

これは大変な事になった。此前の様に全機、無事帰還出来るとは思われな

い。戦隊長も、知覧基地の参謀直接の命令だがなんとか方法を考えよう、と言うことになり、早速知覧に行かれ、対

艦用六〇口径爆弾何発かを受領、これに物量投下用の落下傘を着け、唐瀬原飛行場の端にて、高度一〇〇mからの投下実験を行った。勿論信管は別梱包であるが、味方の飛行場投下とは、初めてのことで、これは成功したが、六〇〇m位の間に、何回投下出来るかである、場合によっては二回に分けての、投下復行となり兼ねない。混乱を予想して今回は三機で行くことになった。

今度は、グラマンとP38の、交替時刻を見計らって行くことにしたが、P38の機上探知機に引っ掛かり、暗闇の中から射ち込まれては大変と、深夜の一二時頃に到達することに決定した。前回と同様、板付基地発進となり。爆弾の梱包、落下傘の装着は、部隊から整備の兵隊が出向いて、してくれたいように記憶する。

板付飛行場を二二〇〇時発進、暗闇の海上一〇〇mを、横窓を開け、只一心平乱に、海面に微かに光る波頭だけを、見つめての操縦である。時折は、青白く光る計器盤に視線を移すが、ちらっと見るのは羅針盤だけで、高度計は零を指し、昇降計は一文字に青白く光っているのみである。少しでも気を緩め、操縦桿を握る手を緩めた瞬間に、波に飲み込まれ兼ねない。

然し実際には、水半線も見えない間

の海上では、波頭の光を見て超低空飛行の方が息の詰まる様な緊張の連続であるが、飛行し易いのではとも考え

る。但し、此の超々低空飛行は、敵艦艇よりの電波探知を避けての、止むを得ずの低空飛行であり、唐瀬原飛行場にての暗夜の訓練飛行には、豊後水道に点々と浮かぶ、いか釣り舟の灯でも水平線を判断する材料となり、大いに助かったものである。

そろそろ徳之島に近づいたと思われる頃だった。塩田中尉から「オッ！」と言う声と共に膝を叩かれ、ハッと前方を見ると、真つ黒な小山の様な物が眼前に迫っていた。瞬間操縦桿を引上げ、擦れすれに飛び越した。敵艦だ！。敵もこちらの近づくのをキャッチ出来なかったのか？、爆音と共に頭上を飛び越され、初めて機関砲が火を吐ききったらしい、チラッと振り返っただけだったが、機関係の曹長が、凄いな！、火柱が！と叫ぶ。

高射機関砲で追隨してきたか、大きな火柱が追ってくる様だったと言う。早々に島の上空に到達、高度一〇〇mで、長方形の成るべく海岸線寄りに、搭載物を連続投下で放り出した。物量投下も落下傘部隊のお手のものであり、成否を確かめる術も無かった

が、爆発の火を見なかったので、多分成功したものと確信する。後続の二機も同様と考えられる。

投下後はそのまま島を離れて、北々東に上昇し、雲上に出て唐瀬原に向け帰還の途に着いた。月は無かったが、雲上はさすがに明るかった。

「敵艦の真上に出たとはなあ、良かった、爆弾は信管を外してあるので、特攻機にもなれんしなあー」と冗談混じりの塩田中尉の声も、緊張の連続から開放された後の一安心から明るかった。

高度三〇〇m、むくむくと盛り上がり鋭く銀鼠色に光る雲上を、飛行すること一時間余り。そろそろ九州にと、処々にある雲の切れ間から下を覗くも、雲下は、暗闇で何も見えない。地点標定も出来ない中に密雲となつてしまった。少々機首を右に振り、豊後水道の南端に出ることにした。

やがて雲の切れ間を見附け、縫うようにして高度を下げた、相い変わらずの暗闇だが高度一〇〇〇mでどうやら海上に出た様だ。いか釣り船も見えないので、果して何処か分からない。

この時、九州全土、空襲警報発令中だったらしい、吾々の機も敵機来襲と間違えられたか？、時計は午前二時を指している、この真夜中に敵の艦載機

の来襲は無い筈だ。

次第に高度を下げて行く中に、僅かに光る波打ち際で海岸線を見付け、やれやれと思ったが、陸地を覗き見ると遠くまで闇である。が此処まで来れば唐瀬原飛行場はすぐ其処に在る。

場周飛行中に着陸誘導灯が点灯された。

全機無事帰還したが、敵艦の真上にいたのは吾々の機だけだったらしく、お陰で機関砲の火柱は見られたが、冷汗ものだった。

以上でこの項を終わりますが、あの時見た特攻機（九八式直協偵）の中に、小生の熊谷同期の岡部三郎君が居たことが、後々判明した。

このときの指揮官塩田金吾

（飛行第65戦隊当時）



塩田大尉（少飛一期、少候二期）は終戦となり部隊が朝鮮咸興から引揚げて来た際、米子飛行場で「もうこの世に未練はない」と拳銃で自決した。

義烈空挺隊の健軍飛行場出発を 見送った第一挺進団長中村大佐 の手記

昭和二十年五月二十四日義烈空挺隊進発直前のことである。午後五時少し前、部員木下大尉と共に健軍飛行場廠舎に着くと、入口の小さな黒板に、白墨で無造作に「本日の予定」と左の如く書いてある。ぐっと胸にせまらるがままに偕行日誌に寫し取った。

昭二十二年五月二十四日義烈空挺隊進発直前のことである。午後五時少し前、部員木下大尉と共に健軍飛行場廠舎に着くと、入口の小さな黒板に、白墨で無造作に「本日の予定」と左の如く書いてある。ぐっと胸にせまらるがままに偕行日誌に寫し取った。

義烈空挺隊は第六航空軍に直屬する部隊であるが、奥山隊は第一挺進団から差出した部隊である。そのような因縁があるので挺進団長中村大佐は奥山隊か唐瀬原から健軍に召致されてから出撃まで、付添って指導に任じた。戦後中村大佐が認めた「義烈空挺隊の遺品に憶う」という手記がある。その中で出撃を見送った部分を抜粋してここに紹介する。なお中村勇氏（陸士36期）は昭和57年に物故されている。

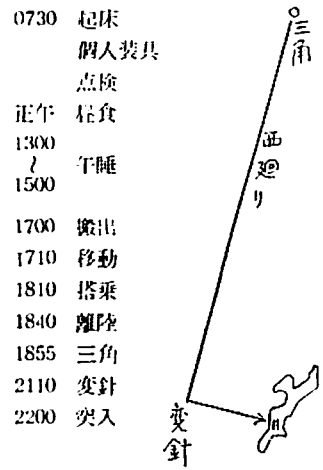
行場廠舎に着くと、入口の小さな黒板に、白墨で無造作に「本日の予定」と左の如く書いてある。ぐっと胸にせまらるがままに偕行日誌に寫し取った。

山來陸海協同はなかなかうまく行かなかったようだ。東条大将が総理大臣になったとき、「日本が負けるとすれば陸海軍の不一致からだ、いかなる犠牲を払っても陸海一体の実を挙げねばならぬ」と端的に述べて訓示されていたことを思う。義号作戦でもそうであった。審議を重ねること十数回空しく好機は遷延された。この間に処して特攻の龍児が特攻の孤児と自嘲さえるに至った義烈空挺隊の真情を体認し、こよなく之を愛していた菅原軍司令官の苦衷の程が偲ばれる。そして回を重ねての大本営に對する意見申となったのである。

本土防衛準備を犠牲にしても沖繩を奪還しようとする海軍と、実質的に本土死守の重責を担う陸軍とは、いろいろな点で食い違いのあったことは事実である。従来海軍では「陸軍は沖繩作戦に不熱心である」との批判があり、更に戦艦大和撃沈の傷心もあって、陸軍は遂に常時その航空戦力の主体であった菅原中將の第六航空軍に、虎の子義烈空挺隊をも含めて、悉く豊田聯合隊司令官の指揮下に入れた。そこでも豊田提督自ら海軍總司令官となり、陸海兩軍の航空部隊を併せ指揮し、義烈空挺隊必死の特攻段込み戦果を核心として、大挙第八次航空総攻撃を敢行し、沖繩作戦の彼我戦勢を轉換せんとして行われた、乾坤一擲とも云うべき決戦作戦であった。

菅原軍司令官はこれより先き、五月十九日奥山義烈空挺隊長、諏訪部第三獨立飛行隊長及直協部以下たる渥美飛行第六〇戦隊長、草刈飛行第一百戦隊長を軍司令部に招致し、実行の細部を協議し、二十日の作戦會議で義号作戦の全貌を全幕僚に傳達し、「義号作戦指導要領」を決裁している。そして義烈空挺隊の段込に膺接して行われる第八次航空総攻撃指導のため、目から熊本一知覽一萬世一熊本と歴巡し各部隊を激励し必勝の構を期したのである。

本日の予定



- 一、変針
 - 二、本島到着
 - 三、只今突入
- 連絡通信

廠舎の一個幹部室では、奥山隊長と渡部副隊長とが黒白闘わしていた。カ

ツ（勝）：カツ（勝）：と平常と何等変りのない、打ち方が調和のとれた音になって響いている。すっかり準備を了った隊員たちは、思い思いに煙草を喫つたり横になつたりしていた。カツ

（勝）：カツ（勝）：と無心の音が全隊員に響き渡つてゆく。この若さでこの嗜みを何時の間に身につけたのだらう。「死なば死ねとたに存すれば何事も大事なし」との覚悟が心底にあってこそである。陸士の53期と55期だから、十六歳と二十四歳の若さだ。奥山隊長は愛弟への遺書に「大東亜戦争を解決するものは若さの力にあり、若人は須らく公明正大快活無邪氣たるべし。散る櫻残る櫻も、散る櫻」と教え、更に「若人の力」と血書している。

副隊長渡部大尉は、筆者の同郷の後輩で、天真爛漫、青竹を割つたような気性は誰からも親しまれていた。特に彼の笑顔は天下一品で、万人が思わずつり込まれて笑つて仕舞うような笑顔であった。

「かねてより折りし時に今会ひて心の中そうれしかりける」と書き残し、そして「続け」と血書している。

今生の一局を終りそれから移動開始に移つたのが五分後である。トラックに分乗して飛行場に着くと、十二機の九七重爆撃機は最後の点検を終つてい

た。健軍飛行場四囲の山々は已に暮色がたれこめていた。第三独立飛行隊の操縦者たちは、隊長諏訪部大尉以下全員巻脚絆で身を固めている。

強行着陸後は奥山隊長と共に、暴れまわる覚悟なのだろう。豪快大量の奥山、誠實篤厚の諏訪部の好配合が当を得ていたことが、義烈空挺隊に重なる幾多の悲運にもめげず遂に有終の美を結んで共に玉碎し得た主因である。飛行場勤務隊の心盡しによる簡素な乾盃の席が整然と準備されている。菅原軍司令官を中央にこれに対して、奥山、諏訪部両隊長が席につく。これに直角に各小隊毎の席が五列に設けられてい

る。一同満盃の上宮城の方向に正対し、軍司令官の発声で大元師陛下の万歳を三唱した。ついで武運長久を祈る乾盃も終る。

隊員は搭乗前の寸刻を思い思いのグループに分かれて最後の歓談に花を咲かせている。隊長機前にも、奥山道郎（陸士53期三重）諏訪部忠一（同54期神奈川）渡部利夫（同55秋田）町田一郎（同56期群馬）小林眞吾（同57期新潟）新妻幸雄（同57期東京）荒谷猛（同57期佐賀）川守田啓志（同57期青森）酒井義男（同57期東京）など顔みしりの一団が無心に笑い興じている。陸軍士官学校の同窓生たちが最後の同窓会をしているようだ。その大部分で

ある56期、57期は筆者が陸軍予科士官学校で教育したことのある生徒である。他愛のない話題につり込まれて、何時の間にか仲間入りをしていた。その時同盟通信の記者たちも、仲間入りだ。誓くしてからのことである。若い

一人の記者が大きな声で「小林さん！濱松に傳言がありませんか！」といった。同僚との話で夢中な小林中尉よりも、耳さたくこれを聞きつけた一人が「オー！小林！〇ちゃんに遺言がないかと聞いてるぜ！」とかた打たれた視線に、顔なじみの若い記者が手を

挙げた。腕白小僧が忘れ物を思い出したときのような童顔に、さっと走つた櫻色のその美しさ、生涯二度と見られぬであろうその美しさ、未だに忘れられない。中尉は雪の国越後生れ色白ろ

の美青年で「今敦盛」との愛称さえあった。正月を二度も祝つて貰つた浜松である。若いものには、それに相応しい思出もあつたことだろう。……これが一つの機となつて一同の談笑はいよいよ弾すんでゆく。そして誰からももなく歌われたのは「太平洋の波の上、のぼる朝日に照りはえて……」と母校市ヶ谷台の校歌であつた。それから数分十八時十分奥山隊長の「全員搭乗！」の一令で各搭乗機に向つて駆

歩で分進してゆく、その足さばきの軽快さ。遊びに夢中で陽の暮れるのも気づかずにいた腕白たちが、さつと家路に急ぐ（鬼の良寛和尚を置きざりにしたことさえも、もはや念頭になく）その足どりにそっくりだ。

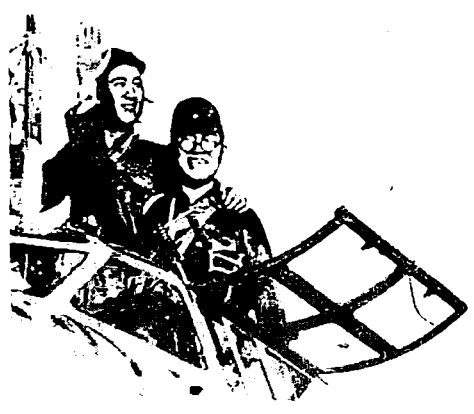
とすれば特攻の暗い面のみを、過高断面に取扱い過ぎるマスコミで、知らぬ間に、現代の青少年は、純真素朴な民族性を、ゆがめられているのではあるまいかと思うにつけ、今でも昨日のように鮮やかに浮き出されるのがこの情景である。

「山雨到らんとして風樓に満つ」、



沖繩奪回の運命を賭けた、義号作戦の鎗矢が―南九州十数ヶ処に布陣する特攻基地に、また豊田連合艦隊司令長官自から陣頭に立つ、全海軍を挙げての海上艦艇に　満々と張られたのである。

全員の搭乗を見きわめてから、奥山隊長はゆっくりと諏訪部隊長の操縦する九七重爆撃機の人となった。たった今菅原第六航空軍司令官から贈られた錦の袋から取り出した小刀を腹部のバンドに右から左へぐつと差し落した風格堂々鎮西八郎を庄する概がある。



「その襟章はもういるまい」「そうです…沖繩にゆけば一躍軍司令官ですから」と笑いながら右の方の階級章を取りにかかった。そのとき思わず機上に上って、左の階級章をとりながら「なにかお母さんに…」なにもありません」と右の軍袴の物入れから取り出したもの、それは印鑑であった。

十八時四十分「離陸！」機一ぱいにも、軽機を胸に抱いて片手を振りながら笑っている、まなじり高く、いつか見ゆる幼な顔のつわものたちは、これから三時間山を越え、海面をはいながら、しかも米軍の真只中にある沖繩の北、中阿飛行場へ向うのである。次ぎ次ぎと離陸する九七重十二機は、



黄昏れこめた健軍飛行場上空を一周し最後の訣別をしながら去って行った。……己に真黒暗になった健軍飛行場には、爆音も機影もない。漠然とどの位立っていたのだろうか。团长殿！閣下はどうに帰られました！」との木下大尉の注意でハッと我にかえる。左手にしっかりと握りしめていた、印鑑と階級章を急いでポケットに入れて、戦闘司令所に向った。

それから十年間肌身離さず護り続けた、「御垣守」たらんとしたこの印鑑と階級章にも、「基地守」生活にまつわる数奇な運命がつきまとった。終戦！挺進神社（空の神兵一万二千柱を祀るもので挺進部隊の基地日向の川南村にあった。）の米軍による焼打ち、これに始まる悲願！参霊立国の茨道を共にして、川南靈堂の建立、祭祀の十年を経て、高野建藝、英霊遷座となつたのである。そして印鑑と階級章を身を裂かれる思いで、奥山隊長のスエ母堂の前に差し出したのが、昭和三十一年九月二十三日空挺落下傘部隊将兵之墓、除幕開眼の大祭りの際であった。

奥山隊長の厳父は陸士第十八期砲兵科出身であり、奥山隊長は父志を継いで、幼にして昭和十二年東京陸軍幼年学校第三十八期生として入校した。父

子二代に亘る生粋の武人であり、工兵科出身であったところに特攻隊長の宿縁があった。十年間以上も果たし得なかつた不義理を責めるところか流石は武人の妻であり、武人の母である。「これまでにして頂いて、道郎もきつと泣いて感謝していることでしよう」と、泣かざりし子を思う泣かざる母。

「私には道郎のものが沢山残って居ります。もしお差し支えございませんでしたら、どうぞそのままお収め下さい。道郎もそれを喜ぶことでしよう」とのことである。地獄の中の佛とはこのことであろう。急に眼前が明るくなった。本心を告白すると手離した後空虚さを思うだけでも、たまらなかつた。ほつと胸を撫でおろしながら

「この階級章は道郎君が祖国の地を、飛び立つ直前まで身につけていたものです。片方だけは是非お守護として御納め下さい。他は有難く頂戴して宝と致します」と別れてから、また六年になる。それ程遠くもない伊勢の津市の遺族宅を未だに訪ね得ぬほどいよいよ厳しさをますます、「参霊立国」の茨道を、生涯を越えて辿るべく覚悟しているものにとっては、手元に残つた階級章と印鑑とは、いつの間にか、かけがえない好伴侶として、生命さえ感ずるに至つた。

平成六年度

回天烈士並びに回天

搭載潜水艦戦没者

追悼式

6年11月20日

徳山市大津島回天碑前



大津島の回天追悼式に参列して

人間魚雷回天の発祥の地、徳山市大津島における慰霊、追悼の式典は昭和30年以降、地元有志の方々が中心となって結成されている回天顕彰会が主催し毎年11月に開催されて来た。

平成6年は回天出撃の第一陣である菊水隊が米艦隊の前進基地であったウルフシー泊地に突入した日に合わせて11月20日に回天烈士ならびに回天搭載戦没潜水艦の五十周年記念追悼式として大津島回天碑の前で取り執り行なわれた。

島へは徳山駅新幹線口に近い徳山棧橋から出るフェリーおよび旅客船が就航しているが、徳山湾を渡るのに四〇分かかるにも拘らず御遺族約一〇〇名を含め八〇〇名を超えたと報道される多数の人々が参加され最も盛大な式典となった。船便も臨時に三便が往復とも増発された。

正午開式、国家斉唱、黙禱、式辞のあと、山口県知事、徳山市長、市議会議長により追悼の辞が述べられ、次いで献花が遺族、戦友代表、各機関、団体代表、国会議員などにより次々と行なわれた。当財団からは右の戦友代表を兼ねて全国回天会会長が参列、献花した。式典の間に慰霊飛行の編隊が度々上空を通過した。また、大徳山太鼓回天振興会の人々による勇壮な太鼓が演奏

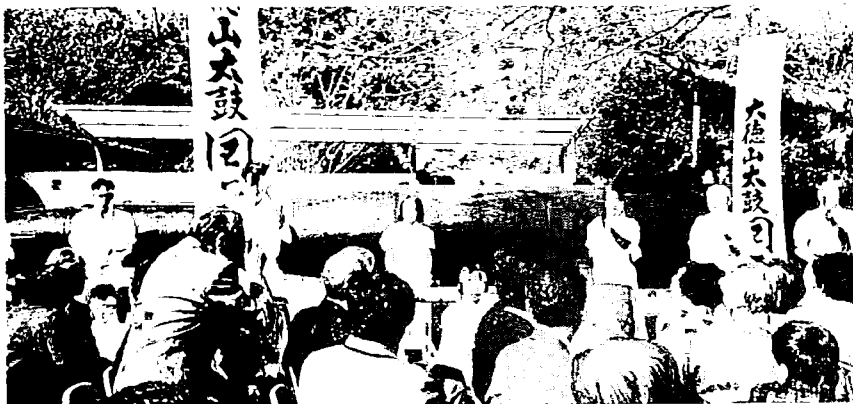
された。

海を望む回天碑の立つ回天記念館前庭には戦没者ひとりひとりの名前を刻んだ碑石が並んでいる。この地こそ、これら搭乗員の宿舎があった場所である。激しい太鼓の音を聴くうち、此処から次々と出撃し再びは還らなかつた多くの戦友の顔が目前に浮かんでくる。

「五〇年を経た今、若人達が御身等を偲んで力一杯演奏してくれているぞ」と叫びたい思いで、感動感謝の泪を抑えることが出来なかつた。

この回天太鼓は前年わが国を訪れた英国の国営放送BBCのプロデューサーも非常に感動を覚え丁寧に録画して行った。テレビ番組に取り入れられ、いずれは世界各国で放映しされると思われる。

最後に海上自衛隊音楽隊が内外の名曲を参列者のための演奏した。今回の変った行事としては俳優森繁久弥氏の詩碑の除幕が式典の途中で行なわれた。徳山市の小川市長から偶々回天の話聞いた森繁氏が深く感動し、その席で「浮きつ島鼓海を訪ふ」と題する一篇の詩をしたため市長に渡した。その筆跡のとおり徳山のライオンスクラブが御影石に刻み、回天碑の傍らに建立した次第である。森繁氏からはさらに今回の除幕に寄せる詩が前日送られて来た。



大津島の回天基地跡はJRの周遊指定地にもなっているが、観光的な要素もこれで加わることと思われる。

次の回天追悼式と平成7年11月12日(第二日曜日)と既に決定しており、これまでどおりの方式で式典が行なわれる。 評議員 小難利春 記

回天について

回天という言葉は天を巡らす、即ち
 衰退する戦勢を挽回して再び発展に向
 かわせることを意味し、この言葉は同
 時に第二次大戦末期、頽勢を挽回しよ
 うとして生まれた特攻魚雷に命名され
 ました。

回天は空の神風特攻に対し海中を潜
 り敵艦に体当たりする人間魚雷であり
 ます。昭和18年に入り戦局は加速度的
 に憂慮すべき状況になり、最早尋常一
 様な手段をもっては祖国を守り得ない
 ことを痛感した黒木博司中尉は仁科閑
 夫少尉とともに不眠不休の研究を続
 け、ついに人間魚雷を創案するに至り
 ました。しかし必死を前提としたこの
 兵器は、上層部の中々取り上げられな
 かったが、昭和19年に入り戦局の悪化
 は特にひどく、ついにこの水中特攻回
 天の着想は取り上げられ、同年9月初
 めここ大津島の地に訓練基地が設営さ
 れたのであります。

同年9月6日猛訓練を開始して2日
 目、黒木博司大尉と樋口孝大尉が同乗
 訓練中海底に突入し、無念の殉職を遂
 げたが、艇内で絶命するまでの約10時
 間書き残した二千字に及ぶ遺書は、国
 を思う一念に貫かれ、涙なくして読む
 ことは出来ません。

回天は昭和19年11月20日西太平洋米

軍基地ウルシー環礁に初めて奇襲に成
 功して以来、約10か月間南太平洋の各
 海域に出撃、奇襲敢行により敵艦隊に
 体当たりし赫々たる戦果を納めました。

しかし乍ら、この間145名の尊い殉国
 者を出したのであります。祖国の危急
 存亡のとき、一身をなげうって國に殉
 じた若人たちのあの崇高な精神と行動
 は何時の世にも変わることなく、永遠
 に讃えられなければなりません。この
 回天烈士の遺徳を顕彰し、その至高な
 精神を広く世の人々に伝えるため、昭
 和36年春回天碑が再建され、昭和37年
 に回天顕彰会が設立されました。その
 後、昭和43年11月関係者の並々ならぬ
 ご努力により、回天記念館並びに付属
 施設が建立され、更に昭和63年同記念
 館の施設整備が関係者のご寄付と徳山
 市のご尽力により行われました。また、
 平成4年11月には回天作戦中の戦没潜
 水艦乗員顕彰碑も建立されました。記
 念館には数々の貴重な遺品遺影が展示
 され、今日では全国各地より多くの
 人々が訪れ、平和への強い願いをこめ
 て敬けんな祈りを捧げております。

また、回天勇士に対する慰霊は、戦後
 から始められ昭和30年以降毎年厳肅に
 慰霊祭が行われております。特に今年
 は出撃50周年記念追悼式が行われ、意
 義誠に深く謹んで慰霊の誠を捧げます。

回天の志を継ぐ

静かなる

海に

静かなる

海に

静かなる

静かなる

海に

静かなる

海に

静かなる

海に

静かなる

昭和五十七年



平成6年度 会計報告

貸借対照表
平成6年12月31日現在
(至2年度)

科目	金額	金額	金額
I 資産の部			
1 流動資産			
現金	2,469		
普通預金	5,849,330		
定期預金	20,000,000		
郵便振替	29,780		
貯蓄	1,146,000		
流動資産合計		27,027,579	
2 固定資産			
(1) 基本財産			
寄付国債(第7回)	100,000,000		
寄付国債(第17回)	24,812,500		
国債債券(ギリシャ共和国)	14,963,250		
基本財産合計	139,775,750		
(2) その他の固定資産			
什器備品	962,725		
電話加入権	149,968		
送付金	1,242,100		
その他の固定資産合計	2,354,793		
固定資産合計		142,130,543	
資産合計		169,158,122	
II 負債の部			
1 流動負債			
預り金	25,320		
流動負債合計		25,320	
2 固定負債			
固定負債合計		0	
負債合計		25,320	
III 正味財産の部			
正味財産	169,132,802		
(うち基本財産)	(139,775,000)		
(うち前期正味財産増加額)	(3,340,966)		
負債及び正味財産合計		169,158,122	

収支計算書
平成6年1月1日から平成6年12月31日まで
(至2年度)

科目	予算額	決算額	差異額
I 収入の部			
1 年会費収入	6,000,000	5,123,000	877,000
2 基本財産運用利息収入	1,300,000	2,252,000	952,000
3 特別会費収入	6,500,000	9,558,200	3,058,200
4 右附金収入	20,900,000	7,277,800	12,722,200
5 出帆事業収入	1,500,000	697,300	802,700
6 雑収入	1,100,000	964,321	135,679
当期収入合計	38,300,000	25,972,221	12,327,779
前期繰越収支差額	10,541,041	61,959,092	21,418,052
収入合計	78,641,041	87,936,314	9,295,273
II 支出の部			
1 管理費			
人件費	1,500,000	1,632,491	132,491
旅費交通費	200,000	151,270	48,730
通信費	150,000	149,110	890
会議費	500,000	510,579	10,579
事務所経費	600,000	600,000	0
消耗品雑費	300,000	1,256,045	956,045
予備費	150,000	0	150,000
2 事業費			
慰霊祭等事業費	3,000,000	11,648,948	8,648,948
特別保安対策費	300,000	0	300,000
特別貸付回収費	500,000	52,920	447,080
出版事業費	1,000,000	3,202,912	2,202,912
予備費	700,000	0	700,000
当期支出合計	20,900,000	22,304,305	1,404,305
前期収支差額	17,200,000	3,672,916	13,527,084
基本財産購入	10,000,000	39,775,750	29,775,750
支出合計	60,900,000	62,646,055	1,746,055
前期繰越収支差額	17,741,041	25,656,259	7,915,218

- 注1 郵便振替手数料20万円及び貸付回収代金の振替手数料50万円が予算外となつた
- 注2 予備費15万円は、消耗品雑費に充当した
- 注3 慰霊祭等の設備費が予算外に大きかつたため
- 注4 予備費50万円は災害対策費に充当した

財産目録

科目	金額	金額	金額
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金			
現金	2,469		
普通預金	5,849,330		
(第一銀行銀行振替預金)	(16,463)		
(富士銀行行内口座)	(321,690)		
(中央信託銀行行内口座)	(65,490)		
(郵便貯金)	(5,445,673)		
定期預金(第一銀行銀行振替)	20,000,000		
郵便振替(東京4-59500)	29,780		
貯蓄	1,146,000		
流動資産合計		27,027,579	
2 固定資産			
(1) 基本財産			
公債			
寄付国債 第7回	100,000,000		
寄付国債 第17回	24,812,500		
国債債券(ギリシャ共和国)	14,963,250		
基本財産合計	139,775,750		
(2) その他の固定資産			
コンピュータ機器	509,257		
電 話 機 器	453,468		
電 話 加 入 権	149,968		
プロセッシング	1,242,100		
その他の固定資産合計	2,354,793		
固定資産合計		142,130,543	
資産合計		169,158,122	
II 負債の部			
1 流動負債			
預り金	25,320		
流動負債合計		25,320	
2 固定負債			
固定負債合計		0	
負債合計		25,320	
正味財産			
正味財産	169,132,802		

※特別経費設置型基平新会協会の平成6年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成7年3月3日

代表 岡田 輝彦 印

代表 小松 利光 印

事務局便り

当協会事務局は事務局長木村元正、次長栗原 宏の2名で運営しております。

○執務時間 10時～17時
休憩時間 12時～13時

○休業は土曜、日曜並びに祝祭日、慰霊祭当日。

○業務内容

会費等収受他会計処理、会員名簿の管理、慰霊祭の準備、案内等慰霊事業業務

○会員関係諸資料、情報等の整理業務

○諸会議の準備、設営等

その他関連業務を処理しております。事務所は都心にしては閑静な場所にあります。何もお構いできませんが、おついでの折にお立ち寄り頂ければ幸いです。